
勇者と書いてパシリと読む（仮題）

秋月霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と書いてパシリと読む（仮題）

【Nコード】

N0356BA

【作者名】

秋月霞

【あらすじ】

一般的な高校生の勇橋礫が、自称天使から《RPGシステム》なる物をもらい、それを使って剣を探したりドラゴンぶった切ったり異世界にとばされたり、色々やっていく…話。書き溜めがほとんど無いので行き当たりばったりですが頑張ります。

1. プロローグです。(前書き)

はじめまして。秋月霞です。

初心者の書いた文章力に欠ける話ですが、楽しんでいただけなら幸いです。

ていうか誰かが読んで下さるのを祈ります……。

1. プロローグです。

目が覚めた。

眠気を払うように瞼をこすって大きく伸びをして、次に枕元に置いてある眼鏡を…。

「…んあ？」

眼鏡が無かった。

というか枕すらなかった。

今更ながらにここが自分の部屋じゃないと気づいた俺——勇橋礫はやばしれきは、眠いのと眼鏡が無いのとで物凄くぼやける視界で周囲を見回してみた。

とりあえず目に付くものは…あれま、真っ白だ。

壁とか天井とかそういうレベルの白じゃなくて、海に潜って「海が青いなあ」って思うくらいに白しか見えない。あ、この例えは伝わりにくいかな。

……にしてもおかしいなあ、なんでこんな所にいるんだ？

普通に生活して、普通に自分の部屋で寝たっていうのに。

とりあえず右手を顎に添えて、考える人のポーズをとって目を瞑って考えてみた。

えーと？寝て目が覚めて周りが真っ白。ついでに何にも無いし自分の部屋な訳が無い。そもそもこの白さは科学的にほぼ無理だろうな。そう考えると…。

「……………ああ、そか。至極単純にあれか。夢か。」

だよな。ここまで周囲が真っ白っていうのは夢以外じゃあり得ないもんなあ。

…となると、王道というかテンプレというか定石^{セオリー}では、俺が目覚めた時点で何か起こってるのが普通なんだけど……。

なにも起こりそうに無いしなあ、寝ようかな。

実は夢の中で寝るっていうのはさ、夢の中で頬をつねってみるっていうのと同じくらいやってみたかったんだよね。

ひとまず横になろうとずっと閉じていた目を開けて……何か見えたような気がしたが、気にせず再び目を閉じると横になった。布団も毛布も何も無くて寒々しいが、別段寒くも無いので問題ないだろう。さて、長年の夢だった夢の中での睡眠を――

「明らかに気づいているのに寝ないで下さいよ」

さっきまで誰もいなかったところから女性の声がした。

目を開けたときに見えたのは気のせいじゃなかったらしい。

仕方なく体を起こし、眼鏡が無いので目を細くして（若干睨んで）人影を見ると、明らかにそこら辺にいなそうな格好の女性がいた。見間違いではなければ背中に羽が見えたし頭の上に黄色い輪っかが見えた。

「えーと？ どのようなご用件でしょうか」

さっき自分の出した結論なら、ここは夢の中、すなわち自分の脳内な訳であるから…。

「あ、もしかして俺の想像が生み出した幻的なヤツ？ うわっ、俺こんなのがタイプなの？ 初めて知った」

よもや羽が生えている人がタイプだったなんて…。

「いいえ。違いますけど？私は見ての通り天使です。礫さんにお願
いがあるって夢の中に来させていただきました」

目の前の自称天使は、優しそうな表情でそう言い放った。
けどなあ、ごく普通の格好をしている天使なんて信用できないね。
例えるなら美術館の警備員がジャージミみたいなもんだ。

「信じ難い。大体、天使なんて物が存在する訳無いだろ！そう簡単
にだまされると思うなよ！」

俺が自称天使に疑いの目（とは言っても眼鏡が無いので先ほどま
でと変わらず睨んでいるだけだが）を向けてそう返すと、自称天使
は肩を竦めながら答えた。

「そう言われても、仮にでも信じてもらわないと話が進まないんで
すけど」

「別に話が進まなくてもいいんだけど」

俺はそう返した。

だって何のメリットも無いし。

「そうすると礫さんは永久に目覚めないことになります」
「ちよっと待てーい、横暴だろっ！」

酷くね？だったら俺に選択肢無いじゃん。

「それほど私はお願いを聞いてもらいたいんです」

「はあ：OK。で？何のお願いでしょうか？」

別にピントが合わなくてもいいだろうと思い、ずっと細めていた目から力を抜いた。

ぼやけた視界の中で、自称天使が笑ったのが見えた気がする。

「ありがとうございます。ですがお願いは後回しにして、礫さんに力を付けていただこうと思います」

「え？俺に出来ることだから俺に頼みに来たんじゃないの？」

それだったら俺じゃなくても平気だね？

「まあ、それもそうなんですけど、礫さんはある一つの能力を持っているので頼みに来たんですが、それ以外はこれっきしなので――」

ある一つの能力？

「はいちょっと待った。ある一つの能力って何？特技的なものって言ったら本の背表紙を見て値段を当てていうどうでもいいのしかないんだけど……」

ガチで特技はそんなもんしか無いです。

「もちろんそんなものではありません。……えーとそれも追々説明するのでとりあえず最後まで聞いてください」

「はい。すいませんでした」

自称天使の機嫌の傾きを察知した俺は、誠意を表すために正座をした。

「はい。で、力を付けるために今日から筋トレをしても年単位かかってしまうので、素晴らしいシステムを用いて短期間で礫さんに強くなってもらいます」

初っ端から酷いな。相手が頼んできてるのに鍛えろ言われたよ。

「で？素晴らしいシステムって何？サプリメント？」

「サプリメントなんか使わせるんだったら筋トレさせたほうがまだマシです」

自称天使はやれやれといった様子で俺のボケをいなした。腹立つわあ。

「まあ、習うより慣れろと言いますし、目がさめてから御自分で何とかしてください。ヒントとしては、四角い平面の物を3回叩いてみるといいかもしれません」

突拍子もない自称天使の説明（？）は、とても酷かった。

「具体的に教えろよ！何？何なの素晴らしいシステムって！」

結果的にシステムをくれたって事しか説明されてねえし。

「ま、四角い平面の物、例えばノートとか机とかを3回トントンとすれば分かりますから」

そういうと自称天使は思いっきり礫の首筋に手刀を繰り出した。

「ぐはっ…、そいですか……」

あれ？痛み感じるじゃん夢じゃないじゃん、とか考えながら俺は
気絶した。

2. 朝ですよ。

目が覚めた。

目を開けると、見覚えのあるアニメのポスターが（裸眼なのでくつきりとは見えないが）見える：気がする。

ふう：よかった。自分の部屋だ。

結果的にあれ、夢じゃないっぽいしね。記憶も確かすぎるし何より…。

「首痛えし：」

左手で首筋を押さえながら思わず呟いた。
物凄く痛い。　　ありや絶対夢じゃないね。

「さーてと、起きるかねえ：」

部屋には一人しかいないのにそう宣言してから（独り言が癖なんだよ！）、体を勢いよく起こして体を伸ばす。でもって枕元に置いてある（今度はちゃんとあった）眼鏡を取り、軽く眼鏡拭きで拭いてからかけた。

あー、世界がくつきり見える。
続いてこれまた大事な物。

猫のストラップが無理やり付けられた懐中時計を首から提げた。
今日は五月九日、ごく普通に高校の登校日だ。

さて、今更ながらに自己紹介をしよう。

名前は知っての通り勇橋礫、髪形は普通より若干長く肩にかかるかな？って位の普通の黒髪、前髪長し。でもって黒縁の眼鏡。

背は若干高くて175ちょいで体重は48。体重の軽さには評判がある。

んな体系やら髪形やらで、私服でいると女子に間違えられることがある。それが悩み。

運動神経は中の下もしくは下の上、五段階評価的には1か2。それくらい運動は苦手だ。でもって頭のほうは若干自信はあるが、それでも中の上から上の中だ。

特技は前に述べたように本当にこれといった事は出来ない。体が柔らかいわけでもなければ何か習い事をしているというわけでもない。一応料理はできるが嗜み程度だ。

そんな何の特徴もない俺は中学時代まで過ごしていた田舎を出て、親戚というか父の妹が大家をやっているアパートに住ませてもらっている。まあ、簡単に言えば両親が他界したからだ。

ちなみに、高校生の俺が一人暮らしが出来るのは叔母さんがアパートを経営していたという偶然と、叔母さんがいい人だったという偶然が重なって、出世払いという結果が生まれたおかげ。

生活費は両親の貯金やら何やらを切り崩しながら何とかやっているし、高校も引っ越してきたので渋々私立に入ったがその分のお金もきっちりある。

バイトをする気は今のところは全くをもってありゃしない。

敷いていた布団を押入れに片付けてから、制服に着替える。

でもって脱いだ服は部屋の隅にたたんで置いておいて、日曜にまとめてコインランドリーだ。

次に朝ごはんとは弁当を作る。

まあ、朝ごはんはごはん味噌汁卵焼きの三つだけで、弁当のおかずもほぼ昨晚の残り。あまり美味しそうとは言えない。

高校生の一人暮らしだし、仕方ないよな、うん。

フライパンで厚焼き玉子を作りながら一人で頷いていると、滅多にならないインターホンが久々に鳴った。

なんとまあ珍しい。

「え？あ、はい少々お待ちをー」

慌ててガスを止めてから、鍵を開けてドアを開けると、俺の叔母さん（40後半）が居た。

「あれ？叔母さん。おはようござー」

「叔母さんはやめろと言ってるでしょうが！」

時刻は6時11分、『おばさん』という言葉に年齢を感じずにはいられない叔母さんから、腹に膝蹴りを喰らいました……。

「相変わらず花がない食卓だねえ、全く」

余計なお世話だったの。とか思うけど、腹がまだ痛むので口に出さないでおこう。

「で、朝から何の用ですか？7時には家を出たいんですけど」

晩御飯用に多く作っておいたご飯と味噌汁、それから卵をもう一つプラスして作った厚焼き玉子を出して、叔母さん…もとい梅さんと朝ごはんを食べていた。

「いやねえ、昨日の夜礫が出かけたから何の用事だったのかなあと」
ほう…やはりか。ありゃ夢じゃなかった訳だ。あの似非天使め。

「ああ、単に寝付けなかったんで散歩してただけですよ。迷惑かけてすいません」

卵を口に運びながら嘘をつく。

あ、今日の厚焼き玉子はちと醤油が多かったかな？

「なんだ、そんなことか。寝付けないなんて今日なんかあるのかい？」

梅さんが皿の上に残っていた厚焼き玉子をまとめて持っていった。
くそう…。

「いえいえ全く。昼寝しすぎただけですよ」

これは嘘じゃないよー、昨日はガチで昼寝してました。雨降ってたし。

残っていた厚焼き卵を梅さんに持っていかれたので、軽く梅さんを睨みながら口にご飯を含んで味噌汁を飲む。

「ふうん…ほいご馳走様」

梅さんが食器を流し台に持っていく。

俺は味噌汁だけでご飯を腹の中へ片付けると、同じく食器を流し台へ持っていった。

「あ、食器くらい洗うんで大丈夫ですよ。それより自分の部屋に戻ってくださいよ」

洗おうとしていた梅さんを止めて扉のほうへ追いやる。

「はいはい。じゃあね」

意外や意外、梅さんがあっさりと出て行ってくれたので、俺は食器をさっさと洗ってしまおうと腕をまくった。

が、叔母さんは扉をちょこっと開けて

「あ、そうそうあの厚焼き玉子、醤油がちよっと多すぎて若干辛かったよー」

文句を残して行った。

「全部食べておいて文句言うとは何事だっ！」

俺は人の料理にケチをつける梅さんを怒鳴ったが、隣の部屋からうるさいと怒鳴られた。

畜生……。

「すいませーん」

一応謝っとくけどさ、仕方ないんだよ。

朝っぱらから人にご飯を作ってあげたっていうのに、文句を言われたんだよ？ イメージとしては、道に迷った人に地図をプレゼントしたら「この地図汚いです」とかいわれた感じだよ？ 全く。

2. 朝ですよ。(後書き)

あと数話で本題に入ります。

(たぶん…。)

3. 登校時間です。

「よし、誰もいないーい」

いつも通り始業より大分早く学校に来た俺は、誰もいないことを確認してそう言った。

毎日こうして早く来て、誰かが話す声を聞きながら寝るのが日課だ。

……別に悲しい奴とかそういうわけじゃないから。友達いるから。ちゃんと。ただ携帯を持っていないっていう残念な理由があって、友達とかと連絡が取れないだけだから…。

まあ、そんなことはどうでもいいんだよ。

「あの自称天使ならぬ似非天使が言ってた、『素晴らしいシステム』とやらを説明しなくては…」

俺はとりあえず鞆を机の脇にかけ、席に着く。

えーと……、ヒントは『四角い平面の物を3回叩いてみる』だったか。

四角い平面の物……机とか？まあ、例えば机って言ってたしな。

そう考えて、机に左手で頬杖をついたまま右手の人差し指で机をトントンとした。

「うわっ」

三回目のトンで机の表面が青白く光り、何かの画面が表示された。

「……RPG system？」

画面の真ん中にはそう書いてある。

そして右上にはパソコンでよく見られる×、下にはパソコンのタブのようなものが七つあり、左から『ステータス』『スキル』『アイテム』『クエスト』『フレンド』『称号』『ヘルプ』とある。

しかし、クエストとフレンドと称号というタブはグレーになっていて、現代人の俺には使えないタブだと十分に分かる。

試しにステータスというタブを押してみる。

『名前…勇橋 礫 《ハヤバシ レキ》』

職業…学生 称号…設定無し

状態…取得経験値

量増加…システム適応中』

なんだ？状態システム適応中って。

まあいいかと次にスキルを押してみると、『・戦闘スキル群・生活スキル群・学業スキル群』と三つの項目が出た。

きっと分類しないといけないほど物凄い量のスキルがあるんだろうなあ。

「なるほど」

ざっと見てRPGに若干重要だと思われるレベルの表示がないので、オンラインにたまーにある完全スキル制のロールプレイングだろう。

「あ？てか学業スキル群って…」

俺はもしかやと思い学業スキル群を開けてみる。

『国語科スキル 1 数学科スキル 1 英語科スキル 1……』

案の定全てスキル化されていて、しかもスキルレベルが全て1……。

義務教育九年間の努力が……あ、でも俺頭の中で計算できるぞ？
うーん……もしや、今の値を1とした場合の数値なのだろうか。だとしたら大分偏りとかが見られると思うんだけど……。

そう思っていると、なんだかイヤホンを付けているかのような近距離から、自転車の鈴の音のような音がした。

「ん？何？」

あわてて耳元を探るが何も無い。ってそりゃそうだ、音楽プレーヤーなんて買う金あったら別のもんに使うっての。

不思議に思いながらも手元に目線を戻すと、スキル値が変わっていた。

『国語科スキル 54 数学科スキル68 英語科スキル 43……』

あり？めっさ上がっとなる。なんで？

しかも俺が苦手な英語だけ丁度数値低いし、若干得意な数学高いし。

軽く考えて、さっきまではオール1だった数値が、俺の能力に適応したってことかな？

面白そうなので戦闘スキル群も見てみるが……ほぼ均一で1。運良く刀剣スキルのみ13だったが、それは中高の体育の選択科目に行われた剣道のおかげだろう。

「あ、さっきのシステム適応中ってやつか」

便利だなあ……。

「でもこっから鍛えろって言ってたもんなあ…面倒だなあ……」

机に浮かび上がっている画面を見ながら嘆いた。あの似非天使め…。

大体、スキルが多すぎて何を鍛えりゃいいか分からんし、《魔法スキル・火系統》とかってどうやって鍛えるんだよ。ライターでもカチカチしてりゃあいいのか？

「ていう俺も鍛えようとしてるってのは、不思議なんだけどなあ…」

眼鏡を中指で押し上げながらそう呟いていると、ガラガラ…と扉が開いた。

しくじった。時計見てなかった！

「あれ？勇橋、今日は起きてる」

入ってきたのは、いつも同じ時間に登校してくる律儀な友人、朝あさ森命だ。髪形はまさしく野球少年というべき坊主（偏見）だが、野球部ではなく茶道部なよく分からん奴。

「……お、おはよう」

そう言いながら、俺はポケットから懐中時計をだして時間を確認する。

……うん、やっぱり七時四十分だ。

「おっはよう！珍しいな、起きてるなんて」

朝森はそう言いながら自分の机の上に鞆を置くと、こちらに近寄ってきた。目線は俺の懐中時計に釘付けだ。いや、懐中時計についている猫のストラップだろう。

「昨晚寝すぎたから寝れないんだよ」

俺は肩を竦めてみせて、懐中時計を胸ポケットにしまおうとしたのだが、

「あーちょっと待った、それ見せて」

案の定そう言われたので、仕方なく首から懐中時計を外して朝森に渡した。

「え？まあいいけど…」

「あんがと」

朝森はストラップをじっくりと眺めたり懐中時計の装飾を見たりしている。

そこでふと気づいた。

机に表示されている画面には気づいていないのか？

「こんな可愛げがある手作りみたいな物をつけてるとは、彼女持ちだったのか!？」

ああ、気づいてないな。

という事は、見えてないんだな。よしOKご都合主義。

「彼女なんていねえよ。それは故郷の幼馴染からもらった物」

「なるほど。あんがと、結構綺麗な懐中時計だな」
「そりゃどうも」

そりゃ綺麗だろうよ、父さん自作の特注品だし。
朝森から返してもらった懐中時計を首から提げ、時計を胸ポケットにしまってから俺はさりげなく机の右上をトイッと触り、画面を閉じた。

我ながらなんとさりげない。

「というか、朝森が懐中時計に興味を示すつてのも、シニールだな」
俺は懐中時計を眺めていた朝森を見て、思った事を率直に述べてみた。

「何を言う！こう見えて小物とか好きなんだぜ？俺」
「え！キモっ…とか思うけど口に出さないでおう…」

危ない危ない。本音が出るところだった…。

「思いつきり言ってるよ。……そういや、そろそろ部活とかの大会近いみたいだけど、勇橋は部活には入ってないのか？」

ああ、そんな季節かあ…。

「いや？俺はどこにも入って無いよ。インテリ派だから運動は苦手だし、特にこれといって惹きつけられる文化部も無かったしね」

そう言っていると、朝森は意外そうな表情をした。

「へえ、部活入って無いのか。この高校、部活が物凄い多いから皆

何だかんだ言って部活に入ってるんだよな。たぶん部活に入っていないなんてのは勇橋くらいだと思うぜ？」

「そんなにか？高校生なんだから、バイト優先する奴もいると思うんだけど」

「まあ、そうなんだけどな？うちの学校、部活数が物凄くて一種のリンゲルマン効果で一つ一つの部活の活動量がすくないから、バイトやってる人でも普通に入れるんだよ」

は？リンゲルマン効果？

「おい、馬鹿がなれない難しい単語使うと、逆に馬鹿に見られるぞ」
「馬鹿言うな！ちなみに俺はたった五人しかない茶道部員なんだ」

いや知ってるよ。

とか思ったが、さすがに良心が痛むのでスルー。

「茶道か…ふあああ…あ…：茶道ってやはり和服？」

やっぱり眠いので欠伸。

「もちろん。茶菓子も出るし本格的だぜ？」

「そうか…：、やっぱり眠いからねるわ」

「あ、やっぱり寝るのか。おやすー」

「おやすみー」

スキル解明は家に帰ってからで良いか。

3. 登校時間です。(後書き)

学校での無意味会話も入ってグダグダだけど頑張ります。

4. 色々説明します。(上)

「という訳で、ヘルプを使ってみよう!」

とりあえず今日の学業を済ませ、バイトも部活も無い俺は友人達の会話をさりげなく振り切って、全力で帰ってきた。

でまあ、全力でチャリを漕いだおかげでテンションが若干上がった故の宣言だったが……。

「おい!うるさいぞ!」

お隣さんから苦情を頂いた。

「すいません!」

「ふう……」

制服を脱いで愛用の真っ黒ジャージを着込んでいるうちに、段々とテンションが下がってきた。

よし。それじゃあ、画面を何処に開こうかなあ……、普通に机でいっか。

俺は机をトントントン、と触り画面を展開させて真っ先にヘルプを押した。

「大体、魔法系統のスキルをどう上げろってんだよ…」

何だかんだ言ってやっぱり気になったので、授業中やら休み時間の間にノートや眼鏡のレンズなどに画面を展開させて、ずっとスキル欄に目を通していたのだが、やはり気になったのが、『戦闘スキル群』だった。

そもそもあの似非天使に「力を付けろ」と言われていたのが、この『戦闘スキル群』を上げれば良いのだろうかとは思っていたのだが、先ほど挙げた『魔法系統』のスキル達や、『幻術スキル』などの明らか誰かに最初の一步を教えてもらわないと鍛えられないようなスキルをあげたい場合、どのように上げればいいのか全くをもって分からなかった。

ちなみに、昼休みに友人の朝森と軽いどつき合いをしていたら、また例の鈴の音がして、『格闘スキル』が二になっていた。

そういう所から考えて、きっとそれっぽい事をしていれば、スキルは上がるんだろうと思う。

なのでヘルプ画面でその辺の項目を搜そうとしたのだが……。

『ヘルプ 質問事項を打ち込んで下さい。』

「なんという簡略化！」

下半分がキーボードになっているので、きっとメインシステムがなんかに繋がっていて、そっちでここに打ち込んだ質問の答えを打ち込むという、ちょっとしたメールみたいなシステムだろう。

相手はもしやあの似非天使なのだろうか。

「まあ、いいや。じゃあ……最初は『魔法系統スキル』のレベルの上げ方でいいか……」

キーボードに触るなんて、故郷を出た時以来だ。

そんな訳で若干懐かしみながらキーボードを叩き、エンターキーを押す。

すると、画面に打ち込んだ文字が消え、『回答中……回答中……』と表示された。

「あ、やっぱり向こうで答えてるんだ」

なんかサポートセンターとかあったら面白いな。あ、でもこのシステムってあの似非天使とかの自主開発？それともどっかの会社開発……な訳無いよな。

あ、答えが返ってきた。

『魔法系統のスキルは、今のところ使えません。いずれ、使える所に行ったときに鍛えてもらうので、今のところは上げられる物を上げておいて下さい』

使える所に行ったときって、どう考えても地球じゃ使えないぜ？でもまあ、使えないならいいか。とりあえずそれらは放置しておいて。

『というか、このスキルとやらを使って何をするんでしょうか？目的によって、鍛えるスキルが変わってくると思うんですが』

まあ、どう考えてもこの平和な国日本では使わないような物ばかりなんだよな。

それにさっきの使える所に行ったとき。っていう言葉的にも、考えられる事はある。

たぶん。異世界。

『確かにそうでした。最初に説明しておけばよかったですね、すいません。今日の深夜24時にまた会いに行きますので、待っていてください。』

「結果的に二度手間じゃねえかよ!!」

今日一日の時間を返せよ!

とかまあ、色々思うがそれは置いていて。

「一から十から百から千まで、聞かせてもらおうじゃないの」

俺は何だかそのまま待つのも癪なので、少々危ないが台所の包丁を22時まで素振りして(こんなので剣とか刀を使うのが上手くなるってのはしっくりこない)『刀剣スキル』が35になったのを確認し、寝た。

はっ、しまった。寝過ごした。

俺は慌てて飛び起きて、辺りを見渡した。

するとやはり、あたりは真っ白だった。

残念な事に、また眼鏡が無かった。

「使えねえな似非天使の野郎……」

「え? えせてんしって私の事ですか?」

「!?!」

思わず口に出してしまったのにも驚いたが、その言葉に返事があったのにも驚いた。

「ははは、あだ名みたいなものですよ。ハハハ…」

我ながら乾いた笑いだと思った。

……じゃなくてだな。

「とりあえず、似非天使殿。一から十から百から千まで教えてもらいますよ?」

俺はそう言いながら、作っておいた質問用紙をポケットから取り出した。

フッフッフ……何を聞きたいか分からなくなりそうなので作っておいたのさ。

「分かりました。とりあえず、何から聞きたいですか?」

「んじゃあ、面倒だからこれに書いてあるヤツを説明していつて」

質問用紙に書いてある質問は全部で五つ。

一つ目、『何を頼みたいのか』

二つ目、『何故俺なのか』

三つ目、『それを頼む似非天使は何者なのか』

四つ目、『ここは何処なのか』

五つ目、『RPG systemは誰が作り、どういう仕組みなのか』

一番聞きたいのは一つ目だ。

「なるほど。分かりやすくまとめて来ましたね。まあ、予測していたので私も答えを用意してますから、楽なんですけどね」

「まあ、じっくりとお願いします」

という訳で、似非天使の講義スタートだ。

「ではまず、礫さんに頼みたい事は――」

似非天使は何も無いところから、薄いノートを8冊取り出した。

……いやいや、手品ですか。そうですか。

「この『異世界旅行記』に封じられていた物、剣やら鎧やら宝石やらを回収してきてもらいたいです」

そう言って似非天使は一冊のノート（表紙には『異世界旅行記1』とペンで書かれている）を掲げ中をぺらぺらとめくって見せた。

所々のページに見開きで地図のようなものが書かれていたり、1ページ使って絵が書いてあるのが見えたが、それ以外はほとんどが文字だった。

「この異世界旅行記はその名の通り、私の主が異世界を渡り歩き、その世界の事を書き記したノートで、要は日記帳みたいなものです。それで、この全8冊の旅行記で丁度24個もの世界について書かれていて、主はその24の世界の物を異世界の魔法やらなんやらを使って、記念品としてこの本に封じていました。とりあえずここまではいいですか？」

えーっと。

物凄いファンタジーだね、うん。

まあ、ひとまず仮定としてその話を信じるとして。

「1つだけ。その、似非天使の主って人はどうやって異世界を渡ったって言うのさ？」

そこが重要だ。ノートに物を封じ込めるのを異世界の魔法を使っ
て。っていうのは理解できる。でも、世界を渡るっていうのはいま
ひとつ理解できない。

ていうか、なんで主^{あるじ}? あなた召使ですか。

「私の主は、個人的な能力として『世界渡り』を持っていたので、
その力を使って世界を渡っていました」

でたよ異能。若干厨二病入ってね？

「それですすね。主は24の世界を渡り、いろいろな事をして精神的にも肉体的にも疲れたので、世界渡りをやめて、この私に異世界旅行記を管理させてから、この世界で長い生涯を終えました。それで、ここからが本題なんです。主が異世界旅行記を私に託して暫くたってから、この異世界旅行記に物を封じていた術式の力が衰え始めて、今から1年ほど前について封印がとけてしまいました」

なるほど。信じ難いファンタジーな話だなー。

にしても1年前か……やけに前だな。

「どうして、1年経ってから俺に頼みに来たんだ？」

「最初の8ヶ月程の間は、私1人で何とかしようと頑張っていたんですが、あまりに厳しいと分かったので、それから昨日になるまで、私の主と同じような何か能力を持った人を探していて、ようやく見つけたので昨日、頼んだんです」

ふーん。

「OK、じゃあさっきの話の続きをお願いします」

「はい。それですね。封印がとけてしまう時までは、ただその場に出てきてしまうだけだと考えていたので、何も対策を取っていなかったのですが、封印されている間に力が蓄えられていたのか何なのか、封印がとけると同時に全ての物やら生き物が思い思いに吹っ飛んでいってしまったんです」

「それで、俺に探し物をを手伝って欲しいと」

「そういうことです」

完全にパシリじゃんそれ。手伝う義理無いよね。

4. 色々説明します。(上) (後書き)

ぐだぐだですが、あと2〜3話で本題入ります。きっと。

5. 色々説明します。(下)

「それって、俺が手伝う義理っていうか……俺が手伝わないといけない理由ってあるの？一応、この間了承してるからやるにはやるけど」

さすがに俺も一度了承した事を破棄するほど人間捨てちゃあいないよ。

けど、理由も無しに能力持ってるからって（未だに自分が能力を持っているとは思わないが）他人のミスの尻拭いというか、赤の他人の事件の後始末を手伝いたくは無いね。

「理由……ですか……」

これは意外な質問だったのか、さっきまで饒舌だった似非天使が言葉を濁らせて、俺が昨日とったような『考える人のポーズ』（右手で左手の肘を掴み、左手は顎にセットするポーズ）をとって考えている。

そういえば上野の考える人の像って、大分溶けて左手をくわえている様にしか見えないよね。ってそんな事はどうでもいいんだが。

俺が頭の中で脱線していると、天使がポーズを解いた。

「考えられる理由としては、礫さんが住んでいる辺りにもいくつか『物』があるようなので、それが発見されると礫さんの日常が壊れたり、酷い場合だとその『物』がドラゴンったりするので、礫さん自身にも被害があります。なので、それを阻止できる力を礫さんは持っているので、それを阻止できるならした方がいいかと……ど、

どうでしょうか。ご理解いただけましたか？」

なーる。そうか。異世界の物って言ったら、大抵危険な物とかだろうし言い方的にもそういう物なんだろうから、回収を手伝えるなら手伝ったほうがいいのか……。

「OK、理解した。とりあえず協力する」

俺は意外と優しいのさ（笑）

「ありがとうございます。じゃあ次ですね。えーっと2つ目の質問ですが、礫さんに頼んだのは礫さんが主と同じ能力者だからです。ついでに3つ目の質問にも答えますが、私は主に作られた精霊のような物なので、魔法やらなんやら色々使えます。その力の一つで『能力者』を捜す力もあったのでそれを使って礫さんを見つけて、礫さんに頼んだという訳です」

へえー、納得納得。似非天使はやっぱり天使じゃなかったか。でもやっぱり少し納得いかない。

「だから、俺能力なんて一度も使った事無いっての」

そういう厨二めいた物なんて持ってないって。持ってたら今頃ラノベ的展開で、少女助けたり悪の組織ぶっ潰したりしてるって。

あ、でも今のこの状況もラノベ的展開か…。

「礫さんは能力持ってますよ？この私が保証します」

ほぼ初対面の人に保障されてもしようがないんだけど…。

「でもさ、使えないなら意味無いじゃん」

飛べない豚がただの豚なら、力が使えない能力者なんてただの人だ！

「大丈夫です。そこらへんも《RPG system》で解決しますから」

「ふーん。まあ、そこら辺の事はあとで聞くから残りの質問お願いします」

「了解です」

ここまできてようやく似非天使が座った。

「さて、4つ目ですが。ここはもうご存知かと思いますが、夢の中じゃありません」

そりゃそうだ。

「ただ、現実存在する所でもなくて、ここはとある山奥の廃村の地下にあった主の基地的な所に、嚴重に秘匿やらなんやらの魔法をかけた場所です。まあ、対異世界旅行記用の秘密基地だとも思っ
て下さい。今は私が礫さんが寝てる時に転移魔法を使って連れてきていますが、礫さんにも転移魔法が使えるようになるでしょうから、
じきに自分でも来れるようになりますよ」

へえー！！

秘密基地か、すごいね。

「あ、でも秘匿やら何やらの魔法がかかってたなら、旅行記から飛び出していった奴らも壁に当たって外に出られなかったはずじゃな

いんですか？」

ヘイ矛盾！

「残念ながら内側からの被害は考えてませんでした。旅行記から飛び出していった物たちは一箇所穴を開けて、まとめて出て行きました……。でももう穴は塞いで、内側からも魔法やら何やらをしてありますから、万全です」

あれ？というかまとめて吹っ飛んでいったんなら、海外とかにも飛んで行った！？

「な、なあ。あと物があるのって俺の住んでる辺りと……どこら辺ですか？」

「あ、海外とか、この基地から遠いところから回収したんで、礫さんが住んでる辺りに3〜4個と、あとこれは後でいうつもりだったんですが……その、この異世界旅行記の内側にも飛んで行ってしまっ……」

「内側？」

ノートの内側に飛んで行ったら、ノート爆発しね？

「要は、旅行記の別の世界……とは言っても1巻から8巻のそれぞれの巻に存在する世界の、一番広い世界に入っ……ってしまっ……」
「つまり、俺は8つの世界に行って回収してこないといけないと」
「そういうことです」

うっわ。面倒！ てか『物』達、頭いいなオイ。

「でも俺、似非天使の主みたいな異世界渡りの能力を持ってる訳じ

やないだろ？」

いや自分の能力分からんけどさ、皆が皆同じ能力ってことは無いだろ。

「そこらへんも大丈夫です。ちゃんと主が異世界渡りの魔法も研究してそれぞれの世界のページの地図に、その魔法がかかってますから」

なるほど、スーパーマ○オ64のステージの入り口みたいな。
絵に飛び込んだら異世界なんですね。

「ああ、大丈夫なんだ。…でもさ？それ聞いて思ったんだけどさ？」
「はい？」

「絶対その魔法のせいで、『物』がその世界入って行ったよね」

その魔法さえ無ければ、その『物』たちは異世界なんか飛べなかったはずだろ。

そう思って指摘したら、似非天使の表情が凍りついた。

「そ…そ、そうですね……………はあ…」

あからさまに落ち込んでいるが、まだ聞きたい事はあるので慰める事にする。

「ま、まあ、誰だって失敗はあるさ。似非天使の主はそれが大きかっただけだろ？気にすんなって」

「はあ…そうでしょうか……」

「とりあえず、終わった事はしょうがないし、最後の質問お願いします」

これ以上慰めるのも面倒だし。

「はい……。えーっと《RPG system》は主が研究していた魔法やら何やらの知識を私が継ぎ、開発した人生チートシステムみたいなものです。仕組みは色々な魔法を組み合わせて、ついでに化学も融合させてるので、作った私にもよく分かりません」

おい。どーゆーこっちゃそりゃ。

「とまあ、質問に対する答えは以上ですが、これ以上質問はありますか？」

うーん……………。

「じゃあ、質問というかこの《RPG system》に対するクレームというか、ダメ出しというか改善して欲しい所なんだけど、改良できる?」

「あ、はい。できますよ」

よし。じゃあこの《RPG system》を俺好みに改良するかね。

5. 色々説明します。(下) (後書き)

とりあえず、説明終了。

ようやく次回から本題入ります。

ここまで読んでくれた皆さん。見捨てないで下さい！

6. ゲーム開始だね。(前書き)

ようやく本題入ります！

6. ゲーム開始だね。

はあ……。疲れた。

全然寝てないし。

とりあえず大きく伸びをして、眼鏡をかけてから懷中時計を付ける。

昨日、あれから色々ところろぷれシステムを改良していたら、気が付けば朝5時になっていて、慌てて似非天使に気絶させられ（もう事情知ってるから気絶させなくてよくね？）今に至る。

なんだか、布団を畳んだら料理するのも面倒になったので、俺は制服に着替えながら通学鞆に入っている財布の中身を確認し、「今日は昼飯をコンビ二のおにぎりで済ませるだけで良いか」と言い訳をして、机の上に画面を広げる事にした。

《RPG system Ver. 2》

改良の末、《RPG system》は名称を《RPG system Ver. 2》に変え、色々な機能が変わった。

まず、ステータス画面の情報量が少なすぎるのでスキル画面と合併。名称はステータスで上半分に

『名前…勇橋 礫 《ハヤバシ レキ》』

職業…学生

称号…設定無し

状態…取得経験値

量増加』

と表示され、した半分にスキル画面が表示されるようになった。

（実際はステータス1に対しスキル2の比率で表示される。）

またスキルに関しても改良した。

まず、あんなにたくさんスキルがあったら、今何が鍛えられたのかよく分からなくなるので、使うのにも鍛えるのにも最大8個まで入るスキルスロットに入れないといけないようにした。これは、昔MMORPGをやったときの記憶を元に施した改良だ。

そして、さすがにこれは無いだろうということで、『学業スキル群』を丸々削除した。

改良した点はこれだけだが、似非天使から《RPG System》に関して色々説明を聞いた。

『アイテム』画面は、異世界に存在する『空間魔法』というのを組み込んだシステムで、MMORPGのようにどんなものでも収納できる。いわばド○えもんのアレだ。

『クエスト』画面は、似非天使が探知した『物』の場所・数・形状などがこれまたMMORPGのクエストのように送られてくる画面だ。

『称号』画面は、その名の通り称号を管理する画面で、称号というのは厨二病の二つ名みたいな物の事で、なんか偉業を成し遂げたりすると《RPG System》がそれを称号として、ステータスに反映するらしい。なんでも、俺の能力とやらもこの画面で管理できるらしい。

そして『フレンド』画面。これが一番使用頻度が少ないんじゃないかと考えている画面で、今後俺以外にも能力者がいて、似非天使が協力を要請して《RPG System》を渡した場合に、この画面で交信ができるらしい。

いや、世界搜してようやく俺を見つけたんなら、そう簡単に能力

者なんて居ないだろと思ったが、なんでも近くにいらしい。今度コンタクトを取ってくるようだ。

そんな訳で《RPG System Ver. 2》のタブ7つが6つ、『ステータス』『アイテム』『クエスト』『フレンド』『称号』『ヘルプ』になり、その内『フレンド』を除く5つが使えるようになった。

「という訳だが、スキルスロット。何を選択しようか」

昨日改良してる時に、ついなので機能が被っているスキルをまとめたり、レベルの上げ方を調べたのだが、やはり選ぶとなると悩む。

戦闘時の立ち回りや身体能力は、使用中の『武器スキル系』のレベルによって左右するという。

ちなみに『戦闘スキル群』内のスキルはざっと100はあった。

「まあ『刀剣スキル』『格闘スキル』『軽業スキル』に『生活スキル群』の『乗用機操縦スキル』は決めたんだよ。決めたんだけど、あと4つ…」

『刀剣スキル』『格闘スキル』は言うまでもない。

『軽業スキル』はあれだ。綱渡りとか空中3回転とかサーカスみたいな動きができるアレだ。戦闘中にあれできたら便利だろうなっと感じて入れたい。でもって『乗用機操縦スキル』はなんと便利な事か。自転車から飛行機まで、このスキル1つで乗り物全てを操縦できるらしい。

それで、問題のあと4つだが魔法を入れるかどうかを悩んでいる。

似非天使によれば、『魔法スキル系』は一度魔法が存在する世界に行って、魔力を感じてみないと使えないらしい。

なのでスロットに入れていても鍛えられる事は無い。

「なら異世界に行くまで、色々な『武器スキル系』を試してみるかなあ」

結果的に『刀剣スキル』『格闘スキル』『槍・棒スキル』『斧・鎌スキル』『弓・銃スキル』『ナイフスキル』『軽業スキル』『乗用機操縦スキル』の8つに決まった。

そして時刻は8時25分

俺は走っていた。

「はあ…はあ…しま、った…今日、学校だった…!」

スキルを決めて、スキル値を上げるための小道具（割り箸鉄砲とかペーパーナイフとか）を搜したり作ったりでのほほんとしていて、気が付けば時刻は8時。

焦って全力で自転車をこいだせいか、『乗用機操縦スキル』のレベルが上がったらしい。今何かは知らないが。

まあ、とにかく間に合ってよかった。

そう思いながら教室に入り、「あ、今日は休みかと思ったぜ」とか言ってくる朝森に「久々に寝坊しちゃってさ」と返し、自分の席

に崩れ落ちた。

「はぁ…遅刻するかと思った…」

皆勤賞狙ってるのに。危ない危ない。

さて。

今週はスキルを上げまくって、クエスト開始に備えよう。

そう考えながら、眼鏡のレンズに画面を展開し、クエスト画面を開く

『クエスト』

- ・ 『妖刀を取りに行け』
- ・ 『宝玉の奪取』
- ・ 『オリハルコンの探索』
- ・ 『ドラゴンの捕獲もしくは消去』

以上全4件』

ドラゴンの捕獲もしくは、消去？討伐じゃなくて？
ああ、この世界に居ちゃいけないからか。

「じゃあ頑張るかなー！」

俺は机に伏せながら小声で気合を入れた。

7. クエスト開始します。

『受注クエスト

《妖刀を取りに行け》 クリア条件・妖刀『パンドラ』の回収。
クリア報酬：回収した妖刀

妖刀の所在地：柳葉市地下水道のどこか』

『受注クエスト

《ドラゴンの捕獲もしくは消去》 クリア条件・緑地竜の捕獲、
もしくは痕跡の消去。

クリア報酬：日本円5000。

緑地竜の所在地：柳葉市地下水道のどこか』

とまあ、クエストを受けてみた訳だが…。

「なんで2つとも場所同じ!？」

これじゃあ最悪の場合、竜に睨まれながら刀拾ってそいつで切りかかるしか無いじゃんか!

宝石は「奪取」って書いてあるからどうせもう誰かに拾われちゃってるんだろうなあ…とか分かるし、オリハルコンなんて「探索」だから!もう面倒ってあっさり分かっちゃうから妖刀とドラゴンにしたってのに。

まあ、まとまってるならまとまってるで楽なだけだな!

「その2つは出身の世界が一緒なので同じところに逃げてるんだと

思いますよ？出身が同じということは、魔力も同じ波長というか同じ感じなので共感を感じ、一緒に飛んで行ったかと」
「なるほど。そういうことですか」

俺が心の中で怒鳴っていたら似非天使が答えてくれた。

さて。

今俺が居るのは例の基地とやらで、クエストに関して質問というか暇つぶしに秘密基地に連れて行ってもらった。

ちなみに日付は5月16日月曜日で、似非天使とのファーストコンタクトからぴったり1週間だ。

遅刻しかけた日から、俺は授業中ペーパーナイフで紙を細かくしたり家で包丁を振りまくったり、朝森と腕相撲したりどつきあったりで、スキル値がそれはもうみるみる上昇し、『刀剣スキル』は70後半、

その他スキルは60位まで行って、あれ？もう完全習得しちゃうんじゃない？とか舐めてたら、今日の朝ステータスの状態異常《取得経験値量増加》が無くなっていて、スキルを上げるのが物凄く面倒になってしまった…。

なんでも、あの状態異常はシステム取得から一週間限定で、取得経験値の量が3倍になっていたらしい（赤いやツかよ）。

ああーあ、他のスキルもあらかた上げておけばよかった…。

「とにかく似非天使さ、俺のこのスキルで何とかなんの？相手は竜だろ？」

「大丈夫ですって。竜は竜でも異世界旅行記内で最低ランクの竜ですから。強い奴はもっと遠くに逃げますから。それに、もう1人の鈴さんに手伝ってもらったらいいじゃないですか。」

そう。あれから似非天使は、捜していた能力者とコンタクトを取っていて、先週の木曜に同業者が増えたらしい。

らしいのだが…。

「まだ一度もコンタクト取った事無いし、何処に居るかも知らん」

残念ながら顔も知らないし、名前も似非天使が言っている下の名前の鈴すずしか分からない。

「えー、鈴さんは良い人ですよ？ しかも礫さんと同じ高校の2年生ですよ？ それですね、能力は《代弁者》って言って無機物やら植物などの、自分では意識を伝えられない者と会話ができて、仲良くなると操れるらしいですよ？」

「へえ、すごいねー」

なんていう厨二設定……。

「そういえば、礫さんの能力は結局どうでした？」

「え？ ああ、そういや俺も能力あったんだっけ。えーっと確か《全知全能》って名前で称号にあったよ？ 使った記憶は全く無いけど」

聞き覚えも無いし使用経験も無い。

ってか《全知全能》って何！？ 何でもできるの？ 何でも知ってるの？ 人体練成できるの！？

「まあ、いざとなったらそれを使って竜と戦ったら大丈夫だともいますよ？」

「…そうかねえ？ というか、スキルを上げたは良いんだけど、得物が無いってのはやっぱり妖刀を先に探したほうが良いかね？」

俺は懐中時計で時刻を調べてから、読んでいた『異世界旅行記1』を閉じて立ち上がった。

そろそろ帰らないと、明日も学校だから遅刻しちゃうよ全く。

「それもそうだと思いますけど、最悪、包丁とか木刀で立ち向かったり、『薬物スキル』上げてから眠らせたりするのも良いんですよ？」

ああ、そういう手もあったか。

「いや、でも『薬物スキル』は20位までしか上げて無いから、妖刀優先で丸腰でいいや」

「丸腰ですか？さすがにカッターナイフくらいは持っておかないと、下水道はどぶねずみがいっぱいですよ？」

あー確かどぶねずみって肉食なんだっけ。怖い怖い。

「でもまあ、そういうのは『軽業スキル』で何とかなると思うんだけど、無理かねえ…」

自分でも驚いたのだが、『軽業スキル』が50超えた辺りからちよつとしたピエロみたいな動きができるようになったのだ。

まあ、まだ空中三回転とかは無理っぽいけど、この間学校でペーパーナイフを素振りしながら歩いていたら、階段で足を滑らせた時に軽く宙返りを決めて着地できた。

ちなみに『軽業スキル』は毎回毎回自転車に乗る前に自転車の上に立ったり、ベランダの柵の上に登って端から端を往復して上げた。はっきりに言ってこのスキルを上げるのが一番辛かった。

「まあ、結構な高さ跳べるのなら大丈夫だと思いますけど、下水道は暗いですから間違えて水の中に落ちないように気を付けて下さいよ？」

「ああ、そうか。懐中電灯がいるのか」

危ない危ない。真っ暗闇の中を手探りで進むところだった。

「まあ、現在地は『クエスト』画面で確認すれば分かりますけど、その辺気を付けて下さいね」

「はいはい。そーいえば、似非天使は何をやってんの？」

「え？ 私は回収した『物』を再度嚴重に封印しておしてます」

あ、なるほど。

「そか、ま頑張れー。あ、そろそろ帰らしてもらって良い？ 時間的に」

「あ、はい了解しました」

よし。じゃあ、明日の放課後でも立ち向かってみようかなー。

7. クエスト開始します。(後書き)

『名前…勇橋 礫 《ハヤバシ レキ》

職業…学生 称号…設定無し

状態…異常無し

スキル

『刀剣スキル』…76 『格闘スキル』…67 『槍・棒スキル』

…58

『弓・銃スキル』…62 『ナイフスキル』…69 『軽業スキ

ル』…56

『応急処置スキル』…23 『乗用機操縦スキル』…72 『

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0356ba/>

勇者と書いてパシリと読む（仮題）

2012年1月1日22時49分発行